其花早満奈飛　三編　全

生花早學三編序

一樹を斷に其時を以てせざれバ。孝にあらずと孔子も説せ給へり。されバ樹を斷菓を枯さるも其切りが時によるべし。挿生華の道ありて己が枝を折花を剪て。鬼神に捧げ祖廟に手向。崇敬なして追善の端となし。君親に薦て其意を慰め老幼に逆へて其目を喜しめバ忠孝愛敬の一たらん乎。

捺を伸べ茎を撓く。邪正得失の始末を鎮へ。其身を諭さバ。則ち教といふべきなり。賓客を饗應して和睦の禮義を正しくせしむるハ。自ら五常の道にかなふ宿や人々花を翫ぶに此意を察せバ聊も挿花の藝にあらで全く勧善懲悪の基となりんと感じ思へる志を述く。巻の始を塞ぐことしかり

天保十四卯年夏　紅葉亭老樵

生花早満奈飛三編目録

真之花挿方之圖

○生花ハ天地人の三枝をもつて一体となし事
又立鉼攅鉼の挌の心得ホハ既に第二編に委し
此圖に出するものハ置花立鉼の挌なり

真行草の分ちあるを著に
東坡曰 真生行 行生草 真如立 行如行 草如走
右掛花攅鉼の挌ニも真行草の分ちあり置花ニ仝じ

行之花挿方之圖

○菊一色ニて
陰陽の花を入る時ハ
留を用ひずして

體用ニ
副て花を
つくふべし又小菊ニても
會釈の處へつくふ時ハ三才の花と心得べし

○何ニても一種ニて體用留と挿る時ハ三才の花之
又留ニ別の花を會釈ときハ
陰陽の花と心得べし

草之花挿方之圖

○三才の形に挿て又會釈を一種つかふ時ハ三才を一体として陽と唱へ會釈を陰とし又一株を體用と挿て留のところへ會釈をはらふ時ハ陰陽なり

○花一本に會釈の花一本つかふ時ハ是則ち陰陽の花なり

○體用を一体として陽とし會釈ハ陰なり

○飾石陰陽三才の圖

○飾石ハ惣じて山の肉を持さるを以て天の石とし是則ち陽也

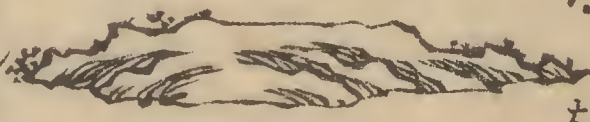
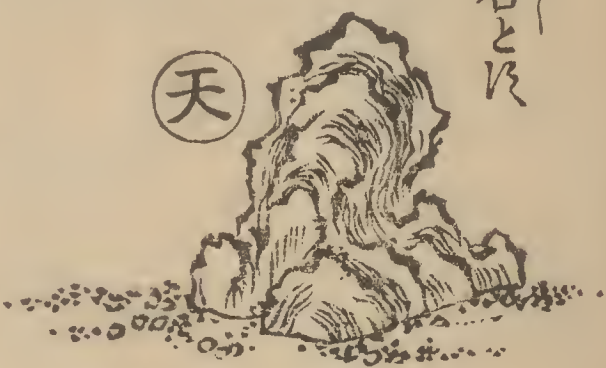
平に形を備へたるを地の石とし則ち陰也

人の石ハ山を中分に持さるを以て遣ふべし則ち天地陰陽の形を兼さるを以て人の石と定む

人

地

天

○此三才の石居やうハ天の石を大株の前へすへ夫より地の石を客位なれバ右の方へ放て些し前へよせて居べし人の石ハ天地の間にて左の方の横へ離して置べし景色に飛石を

添て飾る時ハ地の石より一寸ばかりを明て小石を置べし此石ハ陰陽を備ふとなり石の間ハ一寸明て次ニ六歩又一寸又六歩と石の間を明て居べし尤石の數ハ半ニなすべし
但し丸き石ハ陽角なる石ハ陰
長き石ハ陽平なる石ハ陰なり
是自然の理ニして蹈返し蹈出し
等一六の數を以て左右へ同じ
姿ニならぬ様ニ風流ニ石を置べし
天地人ともニ何れの石より出ても苦しからず

○砂石を遣ふ時ハ白きハ陽ニして花ある所ニつかひ黒きハ陰ニして水の色なれバ花なき所ニ遣ふべし
○廣口馬盥の類ニ水草を挿る時ハ池の景色を備ふべし
○陸草ニ水草を會釈ときハ澤と陸との景色を分けて挿べし又石ニ二をつかふ時ハ陰陽と居べし
○三才の石を遣ふ時ハ花を石の前より出しても後より出しても苦しからず又景色なくバ中心より先へ出ても苦しからず
○飾石ハ天地人三才の石なり遣ひてもよし又蹈出し蹈返しハ三才の石の内いづれの石より出てもよし隨分拙からぬ様ニ遣ふべし
○廣口の取扱ひやう真中を中心と定め夫より主位客位と

應じて左右へ挿るを時宜によるべし
花の方の水ハ花を養ふを以て動く理あり是則ち活の水
にして陽なり花なき方の水ハ動かざるを以て死の水とて陰
なり此水へ浮葉あるひハ芽吹葉をつかふ事あり
○株分の分量ハ花の高さ十分一を取て幅とし挿べし魚
道谷間株分いづれも同じ事なり
○株分魚道と二種の時ハ用の下へ横鱗として入べし又景色
あしき時ハ見きりて如桜に逆まつらふ事もあり又三種の時ハ廣
口の半に一種いれ左ならバ左へいれ右ならバ右へいれて片一方ハ
明てをくべし

○性を愛して花を取あつかふ事
○性を愛して花を挿る時ハ開ハ内にとりて大の添として
留ハ蕾をつかふなり花ハ陰陽として葉にて三才をとる
べし又花同じ姿の満開二輪ある時ハ一輪ハ高く花の性の通
所を入べし一輪ハ下にさげて其ハ花の上に葉をかざして入る
則葉の下にある花ハ性の通る事なし故に同じ花にて
陰陽の差別を備へるなり又葉ハ平く受て天を守るハ
性つよし天を受ざる葉ハ性弱し又葉を透し時ハ二枚ハ
平に受るを用ひ一枚ハ受ざる性の衰ひたるを入べし
又枝ハ直にのびたる枝ハ性つよしといへども天に逆ふを以て

詠めにあらざる故に性弱き理あり又枝は横に出て末の上りたる所これ強き性なり又此枝に准じて同じ姿に出る枝は詠めにあらざる故に後より出る枝は直にのびたる枝を添て遣ふべし是にて則ち性強くなる也

○満開は其色を去を以て陽なり

○蕾は花の色を産を以て陰なり

○半開は両部によぶ故に性つよき理あり

○蕾半開満開と花揃ひて有ときは半開を体につかひ満開を用にもちひ蕾を留につかふ

○半開を体につかふ時は葉の性弱き所を花に添て入べし

躰の花は短くとも長きより性つよし

○満開を躰につかひ花の尺ながくとも葉に陽の受るく捻れ葉あはく有ときは是則ち性よはし又留は躰に准じて性を勘考すべし

○枝々花の躰ちかく入るといへとも性つよき時は長き理あり又躰長くして性に表へ見へる時は則ち短き理あり

○枝の伐口は惣じて平に伐べし

右枝に太細ある時はいづれも平に伐てよし若太細なくして同じ形の枝ならば前へ出る枝は平に伐てうしろへ扣へたる枝は少し斜に伐べし

○強弱の
枝の圖

此枝ハさか〳〵しといへども性つよし
其性とふるを以て
鱗の格に備ふ

此枝ハなぐ〳〵しくて詠めありといへども
性弱し

○草木ともにそれ〴〵姿ありて花に三段の性あり葉に三段の
性あり枝に三段の性あり是九の性にしく四季を守る則
葉ハめぐミて青葉となり紅葉して後散ことあり是三
の性なり枝ハ大中小と三段に延る出生おの〳〵斯のごとし

○蔓物強弱の圖

○如圖ハ蔓先なぐれ
下て性よはし

○如圖蔓先天にむかふ
時ハ勢ひあり

○曲花に渦を拵んと欲ふ時ハ上座
床なれバ右旋に曲下座床
なれバ左旋に巻と心得べし

○曲花
渦の
心の
圖

此所より蔓を切ときハ
左の如くになりて蔓先に
勢ひつきて花になるなり
木物の枝にても同意なり

右旋の渦

左旋の渦

○躰よ曲有る時ハ用よ曲なし用よ曲有る時ハ躰よ曲なし尤花
器の大小よ應じ鱗の挌を備へて其餘ハ功者の風流よ任せて
景色をよくもべし
如此ハ折釘ひぢ金などいひて嫌ふ
○如圖真直よ伸るハ
上下
横又ハ
前へ
對ひたる等
何れも嫌ふ枝なり
如此地をさしたる
枝を禁ず
葉ふくも斯
さがりたるハ露
落しとのひく
嫌ふべく
○如圖なりたるハ折釘とハ
いふべからず
禁ずるに及ばず
○此のごとく根もと捻れ
左右より入
違ひたる
へ
ひがき
などゝいひて
大きに嫌ふなり
○横へ真直に
さしたるも
又枝
うち違ひ
此の如き枝ハ心を切
身を害ふ
ゆへに
枝と
いひて
大きに
禁ず
十文字の如く見ゆる事を禁ず

図の如き枝ハ生れつき性つよければ
此ごとく見切を嫌ふ
如図花器のふちへ
病の枝
おもしろく見ゆれども
図のごとく片葉片枝なるを禁ず
かやうに弓を引ごとくなりたるを禁ず
如図左右同じ長さにて花の並びたる形を禁ず
此ごとく両方へ同じ様に
此ごとく枝すぐに穴の出来を禁ず
左のごとく大輪を低ふ遣ハあしし
葉まへに有て
見ゆるハ苦しからず
此ごとく
禁ず

○此ごくだん／＼花をへらるを嫌ふ
○此ごく左右同じ振く出さるを禁ず
○此如く
○此ごく葉の重なりたるを禁ず 花も又同じこと
○此ごく下りさる葉をいむ
○此ごく振り返り負を見合せさる如くなるを禁ず
○是を天蓋などといふ
真正めんに花の向ざるを
○下の図のごく左右へおなじ振ゆ出る支を禁ず
○此のごく天の陽気を受ざるを死花といふ
○かやうに左右へ抱き合さるごくなりたる枝を嫌ふ
たとへうつむき咲出生の花なりとも取なをして上を向くやうに入べし葉も力なく下へ垂るハ死葉なり
○此ごく前より後へまはし又ハ後より前へまはすハ悪し
○此如く両方へ引せりたるをいむ是ハ初心の内ハ心づかずしてよく挿るヿ有
前後左右へ同じ長さなくひつきりたるを禁ずいづれなりとかくを少し切てよく

○此如く前後へ長く出るを禁ず

○圖のごとく花器の正面へ葉の覆ひかかるを禁ず

○此如く平に葉の見ゆること嫌ふ也
但しいかほど微さき葉は禁ずるに及ばず

○此ごとく會釈の花

○右に同じ

うしろより出るやどり木の如く見ゆるは悪しく
同木同草は苦しからず

○圖のごとく木を草にてつむことを嫌ふ

○又木にて草をつむことも悪し

○葉にて花をつつみ隠すことを禁ず妓しそれも見ればよし

○菊の花下へむき或は横へむきなどしたる都合悪しく咲るは大菊中菊は花の真中より軸まで針金を花の中にさし入て操なをすべし尤花の真中より軸へ七八分も差通すべし

此ごとく針金をさし通し軸へ入るべし

一花一葉

○一花一葉は挿べからず葉一枚に花一輪咲ものはいかならず又葉二枚に花一輪も好ましからず然れども珍花にて花一輪の時は止を得

ざれバ葉を會釈して挿べし満開なれバ陽中の陰なり蕾なれバ陰中の陽と心得べし是等ハ無拠ときの事なり
芍薬など一輪いける時ハ花の上下に葉をつかひて葉の間に花を含ましくて挿べし

○諸草木を挿花に取あつかふ時ハ其性を正しくして法を備ふべし先春の梅柳の類を入る時ハ後咲の水仙椿を會釈又後の梅を入る時ハ菜の花蒲公英の花を遣てよし都て是等の類ひに准じ四時の季候を守て考て花を取あつかふべし

○秋海棠ハ忌物なれバ伐あとを禁ず故に莨又ハ爪にて切て陽の通づる時候ゟ陽中の陰に伐べし切て後土などべる程篤と焼べし夫より冷水へ入て行の養ひにすべし又細き竹のやうにして節の間ハ上皮むき裂割ふしぐハ強く向ふまで突ぬきて花葉とも残らず水に入おく事半時ばかりして取出し其後根ゟり水に差入おくべし花葉露かゝりて後花に挿べし露ある内ハ重らかにて花乱るゝものゆへ是を心得べし

○朝良ハ陰の募る所にて切べし夜の子時なり翌日開

かんとする蕾に今日の花の売の先を切りて蕾にかつけ借軸にて
心の侭に結びつけ石を付けて水に浸しおき
翌日花に入れバうらさんと思ふ時被
たる花売を取りて揚枝に水をつけ些し介借しりて開かすべし
又或傳に朝貌にかゞつけ置てハ花売よりハ葱をよき程に切
て被けおく方花売に勝りしと云り是又一理あるべし
○又朝きりとる朝貌を養ふにハ満開の花の中へ白砂糖と
氣の強き酒と等分に合せ火にかけて解して筒とさまし
かんざしの耳掻にて花の白に指入べし尤二雫下ら強りて三
雫よくよし　此二味ハ朝貌の敵薬なれバ花にさゝるれバ忽ち

腐るなり心得べし
○夏菊ハ葉のやしなひを第一とすべし花ハ些しも養ふとも葉
の勢ひよくバ容席にも挿べし朝夕に切とりて其侭根を
焦し又ハ熱湯に入て煮留べし夫より冷水に深く活
おきて葉にハ霧水を吹かけ置べし花器に生るまでハ昼の内ハ
あらバ土地板間などに養ひて湿させ置べし水から夜も余り
繁ればバ葉むせて腐れ易し但し夜分とくも風つよき時ハ
湿させ置べし又凋れたる葉へハ水を灌ぐべけ　薄き葉孤
などハ色こく冷る所に一時だくり湿させ置べし　葉もこの
如くに勢ひつよくなるべし夫より根を煮とめて挿べし　惣

しく菊ハ葉より水を上るものなれバ其心得て養べし
又厚き葉茂てつみとらざれハ葉むせて腐るものなり
夏菊ハ一しほ養ひに心をつけ日のさし入る所火氣もよろし
取けぶりなど籠るところを禁べし

○夏菊ハ苅込に生る事を禁ず凡三本五本を以て挿
方とし葉を艶しく透にべし又花ハ大小なくして難
儀のせうハ花びらを採て小輪として遣ふべし又花
の臺を指よく蕾まし花の大中小を揃へて生べし

○夏の小菊ハ照葉あらバ除くべし唯青くとしたるを
夏菊の性とすべし

○秋菊ハ花の勢ひをよく遣ふべし採て其侭活
込ばよく水を上るなり又中菊の
首下り或ハ直てのびて挿
がたきを撓るハ泥鏝を
温めて枝に撓く
又ハ花首の茎へ
當て撓なをすべし
尤ぬくとのさめぬ内と冷水てひたすてよし
都て菊の撓方ハ焼泥鏝よて直すべし
又二岐三岐よなりたる長き枝の節ありきハ水上がりてきても

有べし是ハ其所をよく打ひしぐか或ハ折とりてかきとめをも
去一本立にすれバ蝕水を上るに但し葉ハ水に浸さるがよし
○秋の菊ハ都て用の花の下に強き葉を遣ふべし水際より
花器に准じて二三寸あるひハ四五寸上に有てよし是を損葉と
いふ若損葉なき時ハ用の葉の下へ小輪の菊をつかふ又葉性
よくしくし躰用留と揃ひそへる時ハ一瓶の内にて見合ひ
葉あるひハ枯葉などを會釈にすべし切葉ハ用ゆべからず
○花ハ躰に半開用に満開留に莟と遣ふべし
○小菊の類ハ花に長短なく難義なるとまく有べし是を
挿るハ枝を重ねてし段どりにへべし三段五段七段九段と

入て至極の花の挿るものあり
○寒菊ハ照葉を第一に遣ふべし照葉なき時ハ寒菊に
なぐしば花の色品くありといへども寒菊ハ黄色に限るへ
○檜扇の花ハ手にて撓る時ハ折るものゆへ故に圖の如くに
糸をかけて程よくひき付一日或ハ一夜水に入おく時ハ心の
儘に撓らるゝ
○蘆ハ朝夕に伐とり
花を損ぜるをよし
葉のふちをすこし鋏にて切すてゝ泉
水又ハ流れなどに残らずさし入おく更半時ばかりして

取出し挿べし又根を湯にて煮とむるもよし

○水慈姑ハ朝夕に伐とり細き竹の揚枝を以て根より葉の際まで上皮を剥とりて冷水に入おきて後取いだして生べし

○竹のやうじにて根より葉のきはまでさき取るべし

○紫陽草ハ花重く軸弱き故花うつむきて生がたし

○此とがりを焼し切とりて水に入べし

花をよく切あらして遣ふべし朝切とりたる時ハ根を湯にさしへて煮留夫より冷水にうつし日さし遠き一所に囲をき一時だうりして挿べし中に伐とりたる時ハ同じ養ましく冷水にうつし夜露をうけて後生べし

○梅もどきを揉るハ紙に酢を浸し絞りて揉んと思ふ前へまきつけ火にてうけて強く焼べし夫より心静に揉つれバ心の侭になる也心焦燥て強く取扱ふべからず過て折ること多し

○楓ハ朝夕に伐とるべし木通の粉を水に浸し置て伐と其侭根を此水にいれおくべし又煎じ出したるも薬気強くてよし

尤よく冷して後入おくべし何れも一時ばかり入置てのち生
べし挿おさめる花器へも此上水を差入おくべし春の若
芽秋の紅葉ハ是非やしなひしてハ保ちがたし夏の青
葉ハ其まゝおくも苦しからず

○垂撥ハ二重切の花器をうけて花を挿る時ハ等分に振
遠へるを禁じ上ハ木物を入下ハ草花を閑情に入るが
定法なり又下ハ木物を挿て上へ草花を閑情に入るも
あれども是ハ好まず
挿べき支へあれバ尤も主客ハ上下にて定むべし

○垂撥の寸法　奥に出す

○問云往昔千利休の門弟五個利休に対し二重切の筒に花
を挿るとき上の重に生るが宜きや下の重に生るが可なりや
と尋ねらしかバ利休の曰この穿鑿ハまづ決せず然るに今月
幸ひに宜き寄合なり各と談じ定むべしと答ふ五人の徒
諸ともに然れバ宗匠ハ如何存ぜられしや兼りたしと云ふ利休ハ
其ハ意味の善悪を言ばして上に生て然るべしと答へられし
とぞ是より定めて上を主とせしとぞ之利休公羽の頃までハ
右の例なりしを道安にいたり専ら花に委しかりしかバ今時
用ゆる種々の生方作法などさだまりしと言り

○惣じて掛花ハ壇越の花といひて草木の枝壇を打こして

此方へ出さるゝ象るを本意とし然れバ水草などハ此意にて
違へる所なれども床などの勝手あしく據なき時ハ時宜に任し
者なり故に萬其心を用ひて生べし

○獅々口て花を挿る時ハ花器の切口へ花のかゝる事を花より
寄てハ許ることも有ども月の輪ゝ花の
障ることを禁じ

○獅々口の
花器の
濫觴

○則ち此一重切の竹花器ゝ獅子口と
云る銘ある事ハ往昔小田
原御出陣の時千の利休
翁此の花器を拵へ牡丹を
挿て献せられけるゝ豊公大ゝ御賞美ありて花器の切口を
獅々口と号くべしと仰ありける是より始まるといへり元来牡丹ハ
異名を鎧草又名取草といへるゝ依て祝し奉りしとぞ

○鉤瓶ハ縄を花より見切ことを
尤らしく雫のたるを
賞翫するなり　禁じ

○一ツ釣瓶ハ床
天井より一尺二寸
下げて釣べし

○二ツ釣瓶ハ床天井より
六寸下く釣なりたゞし
二ツの内の其一ツハ床柱より

○図の如く床柱の外へ
枝の
出るを禁じ

○置花器よ
九寸より釣べし高ハ見合てよし

生ても床がまちより外へ出るを禁ず
○二重切を掛て上下に挿る時とても床の内へ入る程に
心しく挿べし
○床柱へ掛花を生る時ハ床縁へ露の落る様に生べし
○掛物に会釈花ハ人物鳥獣の類ひ又名印ホ絵の
賞美を主として花ハ是に准ふべし依て画の専要と
なる所ハ勿論すべて模様なぐめ多き所ハいとひ避
べきなり花を以て掛物の書画を覆ひ隔つる類ハ悪し
絵を借て生べし又枝葉梢などの白地に障るハ猶更に
○掛物に有る花を挿べからず若一所望あらバ止古文を得ざれバ半開

一輪に蕾を添て用ひて挿べし
○掛物によりてハ如何様にても挿べき花の障る事ありその
時ハ床の幅を三ツ割にして中の一分を除て左右の一分の内へ
花を置べし

○
温如春色爽如秋
一榼搏前自献酬
百萬愁魔降未得
故應用爾作戈矛
□□

○尤かけ物の絵と生花と対ひ合て取合よく挿べし
○掛物一幅の時ハ花一瓶にても二瓶にてもよし又二幅対の

時ハ花一瓶にすべし又三幅對の時ハ花一瓶にても二瓶にても
よし二瓶なれバ三幅の間に置べし玄名構ハぬ様に心得べし
○卓下の花ハ低く生るものにて卓を恐れるところ少し下へ
さがる様に生外へも出ぬやう柱へも障らぬ様にすべし
○亭主より客へ花所望の時ハ客兼知のゆゑなる有バ御掛物
を巻とるべし客ハ其侭と挨拶すべし扨亭主より花
器へ水を七分ほど入て床へまへおき花盆へ花をのせ花配
の木鋏小刀花巾ホをのせて其座敷の宜きに随ひ右へ
なりとも左へなりとも置べし次に水つぎに水を程よく入て是
も其ハ傍におくべし尤花ハ少しも手入をせず枯枝枯葉ホ

迄も其侭にて出すべし花巾ハ白の麻にて一尺三寸巾七寸までにて
べし ○但し右寸法ハ遠州流に用ゆるところ則ちたゝみやうハ竪の長き方なく三ツにおり横を四ツに折べし
○客いよ／＼花を生る時ハ始に花器に對ひ花配を入花を
見立夫より床の前へ進ミ上座なれバ床を左にて
見て手早く花を生てのち御免下されと
挨拶して正面へ廻り花を直し花
掛物に構ハぬ軸先に置べしさなくバ真
中に直すべし夫より主人に水を御次
下されと挽むに主人辞退すれバ自ら足水をすべし軸先元とのぶれハ
明口の方のとなり軸元とのぶれ床柱の方に水程よく入て後薄板を

ふき紗小刀花巾水次ホ花盆へのせて勝手口へ置亭主塵取
と羽箒を持出て残たる塵を掃入て勝手へ持入まつて花
盆ホなづさへ入この時客より花御覧くだされといふ相客一同なれバ
亭主相客ゝ對ひ御覧なされと挨拶すべし相客ハ其時先
お先へと辞儀いふバ亭主ハ左様なれバ御免下されと挨拶して床ま
對ひ一畳ゝ隔て座し両手をつき掛ものよりして上より段ゝ見べし
花ハ真より見始め篤と水際まで見終り扨感賞の挨拶すべし
○相客の作法ハ花を先亭主ゟ見せて後見るが礼儀なり
亭主の挨拶ハ言ゟ及バズ相客の挨拶ハ御花出来て御
艶らしき御事なり御花器の景色も一入増しなどゝいふべく

○掛物もづし有バ客花挿おゑりて後掛ものを花ゟ障らぬ
揚て掛べし
○客ハ我挿る花なれバ飯く節薄板の上ゟなりとも又ハ手水
鉢の上ゟなりとも置て飯るが客の礼儀なり
○亭主よりハ其侭御さしおき下されと挨拶あるが礼儀なり
挨拶あれバ格別あいさつなきゝ其侭ゟ差をくハ不作法之
貴人などハ其侭ゟ是あるべき事なり
○會の花拝見の時ハ次の間ゟ服差左扇子を置て床の前へ
進ゝ畳一でう手前ゟ手をつき先掛物を上よりだんゝと見
下り夫より花を左より見て右の方を見べし又水際を見

たき時ハ御免下されと挨拶して夫より左の膝より摺より水際を篤と見て下座へ下り花を下より段々に見上る床の花を今一應見べし夫より次の間へ退くべし又両側あらバ右旋に見るべし

○垂撥掛板ハ張床に用ゆる品壁床にハ用ゆべからず

會の生花拜見の仕様

床の外柱などに掛るハ勝手次第なり東山殿紹鷗の頃張壁に用ひられし好みより始りし物なりとぞ

○垂撥寸法

上より釘穴まで六分

三寸

○ 皆間一尺八寸 又ハ二尺二寸五分も用ゆ

○惣長サ三尺八寸 又ハ四尺八寸も用ゆ

釘穴の廣さ六分 長さ一寸二分 圖の如く彫べし

透の長さ一尺五寸 又ハ一尺六寸 廣さ一分

右ハ東山殿の頃の寸法のよし

折釘の圖

當時ハ流義によりて寸法の異同あり粗畧を次に出す

上より釘穴まで一寸

此間一尺五ア

此間一尺五寸

惣長サ四尺九寸五ア

釘穴の廣さ 三歩 長さ 六ア □ 圖の如く角ニ透るなり

欅の生地或ハ黒塗ホを用ゆ

右ハ遠州流ニ用る所のすん法なり

上ヨリ二尺三ア下りて折釘

上より釘穴まで九ア

惣長サ 四尺九寸五ア

掛板寸法

釘穴廣さ 三歩 長さ六歩

右ニ同じ

上より一寸二ア下りて丸穴○丸穴さし渡し一寸二歩の

惣長サ三尺六寸五分 幅三寸五歩

○板のかしらより二尺一寸下りて折釘 右ニ同じ

釘穴の上つらより下の丸穴の上つら迄九寸

丸穴のさがり六歩の

此間 一尺二寸六歩の

上より釘穴の上つら迄一寸

惣長さ 四尺八寸

板厚さ二歩か八りん

釘穴竪六歩か 横三歩の

溝の幅 一歩か七りん

右ハ未生流ニ用る所のすん法なり

惣長さ五尺

板の厚さ上ヘ三止の　下ヘ二歩

右ハ千家ニ用ゆる所なりとぞ

東山殿御花折敷之圖

指径九寸九歩の四方　縁高サ一寸　外法ニて

足の高さ三寸八歩の　板の厚さ三ア

足の切き横三寸八ア　竪二寸八ア

板ハ杉の生地なり

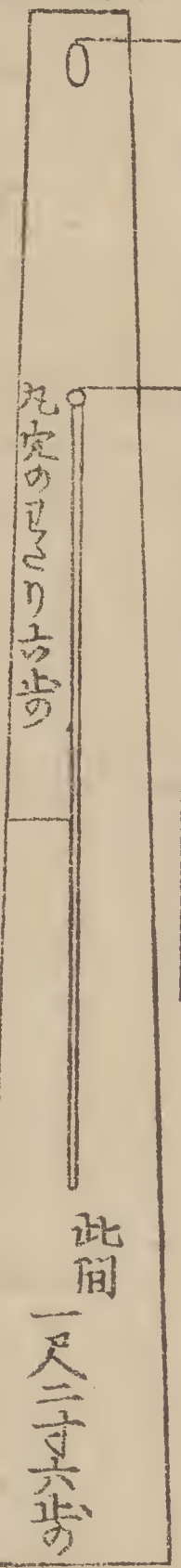
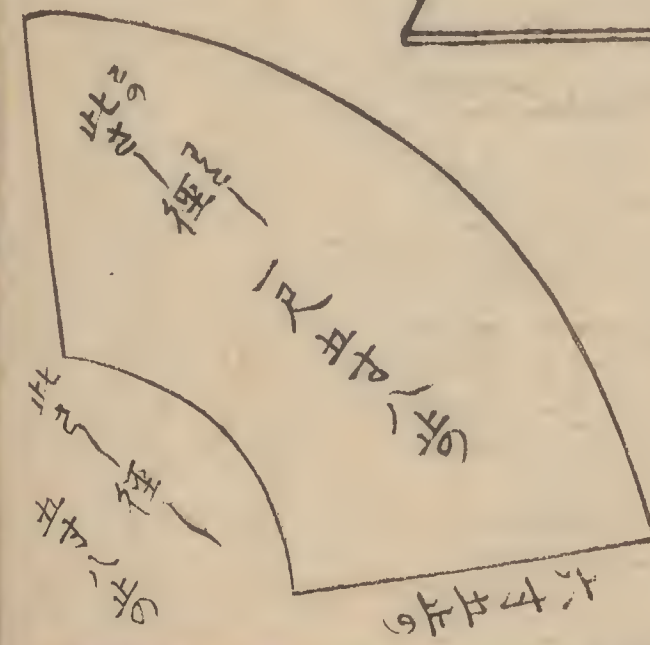
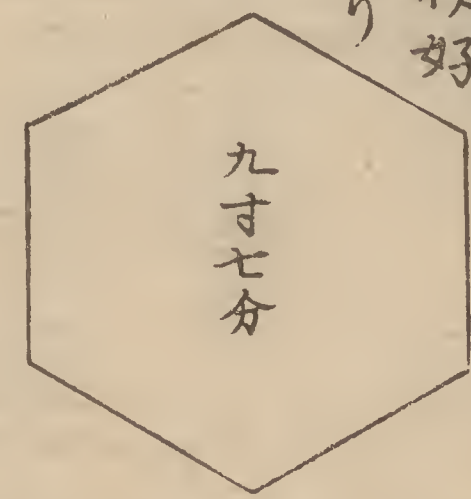
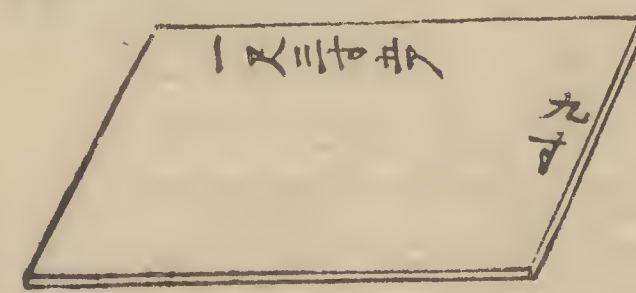
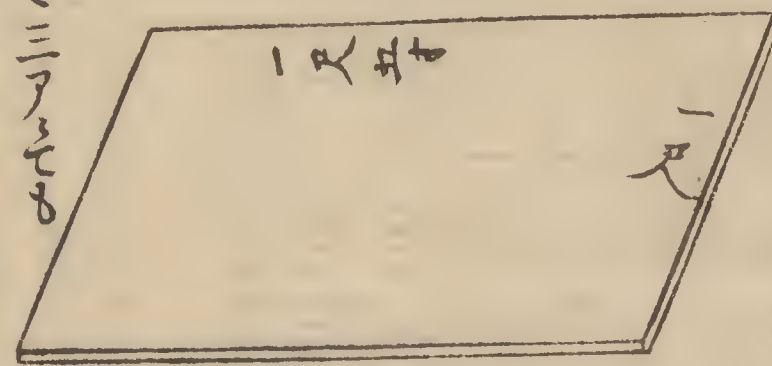
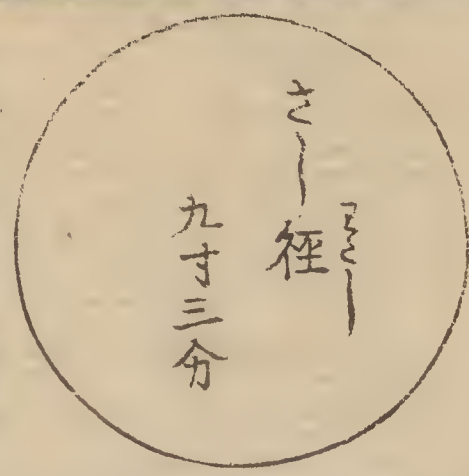
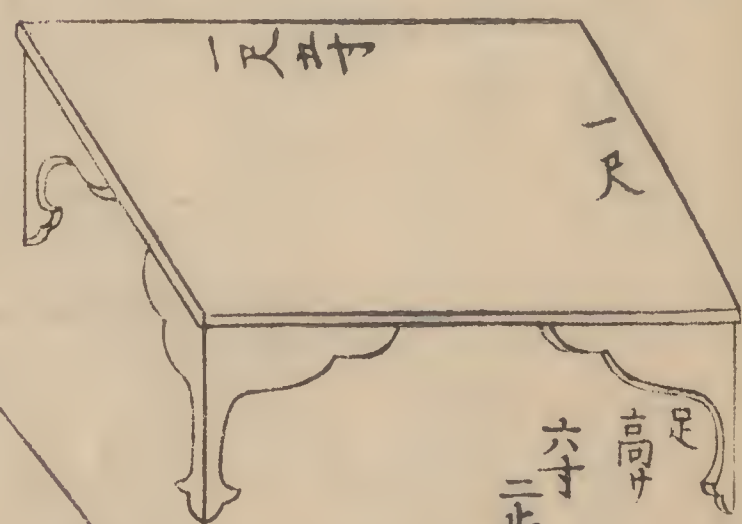
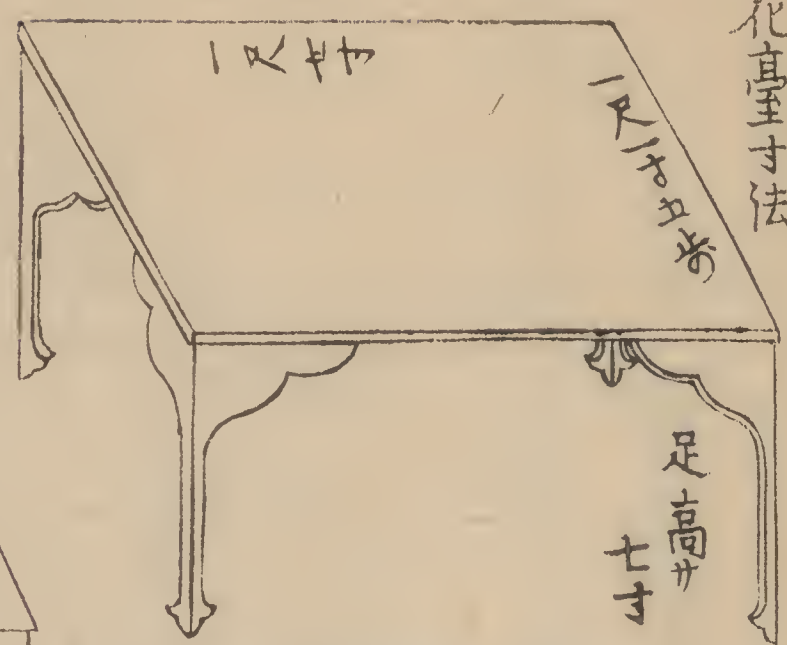
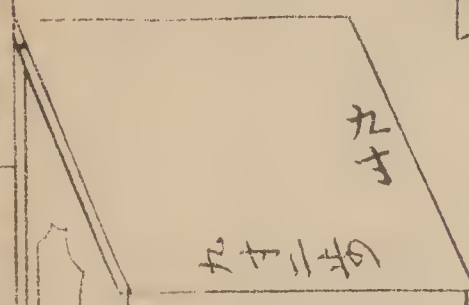
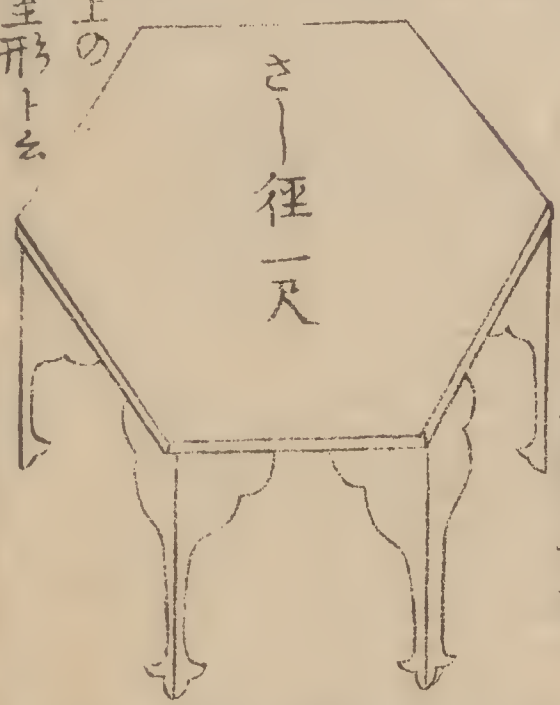
但し此寸法ハ平人ニハ用ゆべからず

○平人の花盆ハ長サ一尺三寸八止の横八寸八止の縁高サ八止の厚サ三止の深サ五止の角切一寸足の切欠塗様好によるべし　尤平人ハ足のおさるを用ひ貴人ニハ足打さるを用ゆといへり

薄き板をすゑる法

大板ハ長サ二尺五寸　横一尺

小板ハ長サ一尺三寸五ア　横八寸

木ハ杉檜欅生地にても塗にても色々物好有り
右ハ何れも古代寸法なり
さし径
九寸三分
又一尺二寸一分モアリ
小口
貝ハの口厚さ三分にても三分五りにてもよし
又矢筈も有
一尺廿
一尺
一尺三寸五分
九寸
九寸七分
花臺寸法
香臺形
花臺ハ高サ七寸ゟ
限る低きハ五寸
より二寸迄用ゆ
一尺廿
一尺二寸五分
足高サ
七寸
一尺廿
一尺
足高サ
六寸
二分
一尺三寸
八寸六分
足高サ五寸又五寸九分
足高サ八寸
又八寸五分の
或ハ九寸
但し八寸以上の
足ハ香臺形ト云
さし径一尺
足高サ六寸

右寸法ハ遠州流に用る所なり

○又寸法　板の長サ　裏曲尺九寸　幅　表曲尺九寸　板ノ厚　二止の八りと

右四方の面ハ　真行草を別つ左の如し

真の薄板の面

是ハ冬用ゆ

行

右ハ四季ともに通じ用ゆ

草

是ハ夏用ゆ

○真の花臺の高サ七寸二歩

右ハ冬の時節に用ゆ

○行の花臺の高サ三寸六歩　四時ともに通じ用ゆ

○圓形の

薄板面ハ貝の口なり

○草の花臺の高サ一寸八歩　夏の時節に用ゆ

脚の附方三ツ割一分づての寸法なり

一分ハ明るなり

○曲尺表裏之圖

表裏の寸法圖の如し

○花臺の圖

右ハ未生流の寸法なり

○花臺ハ床をかざりたる道具として床の上に用ゆべき品にハあらねバ古来ハ皆薄板なり然れども近頃の流行にしたがひて一統床に花臺を置ことゝなりぬ其脚の余りに高きハ無りしを花器に盃形の薄ぢくを拵へ出せしより是ハ口ひくきて丈低き也へ花を生るに格好あしき故高き臺にのせて其形勢を決りしより足高き臺世に行はれいつしか訳なく用ある事となれり會などの節にも高き臺を用るが故に床の花よりも床脇の花なるか高くなる様に成ゆきて床を恐ざることに似て不作法の事ども多かり然ども流行なれバ是非もなく故に床の花をも據なく花臺を用ひて花を高く

置そめしが例となりて會の節ハ思ひ〳〵床にも花臺を置板床にも花臺を置ざれバ見苦しき様となりたり然バ其ハ意を得篤して時宜によりて用捨あるべき事也

○花留つかひ方

○蟹ハ上り下りと陰陽を遣ふべし又一疋あらバ座敷の形容に應じて遣ふべし但し花と花止と陰陽に成やうに遣ふべし尤も花止の蟹ハ海の蟹にあらず陸の蟹と心得べし

○兎ハ水草に禁ず木賊萩小車芙蓉の類閑情ありてよし

○二足鯉ハ陸物ニ禁じ水草ニ遣ふべし
○龍ハ水陸両様につかふべし観世水も同様なり
○碇ハ船ニ遣ふ時ハ往来の舟ニ遣べし泊舟ニハ変して用べからず
○五徳ハ流義ニよりて用ひざる例あり用捨すべし
○蛇篭ハ水草ニ用ゆ又陸草ニるも多分川添の心ニて用ゆべし中ニ砂石を入て用ゆ玉川の山吹などニ遣ひてよし

○轡組方

○轡ハ組時ハ随分音のせぬやうニ取あつかふべし
○水鳥の組方ハ鏡の表を上ニして両方とも重ねかけて中の紐つけの方の穴へ引手二ツとも入れ打違ひにすべしまたハ

下ニ成て鳥の頭なり引手ハ後の両方へ踏むりて足と成なり
○此輪の付たる方鏡の表て
○亀の組方ハ始ニ引手を鏡の裏の方へ抜ておき夫より鏡の裏を上ニして両方かさねかけて中の方の紐付の穴へ引手二ツとも差こみて打違へにして左合ハ上ニ成て亀の頭となる引手ハ向ふ足と形るなり

○鞋の組方ハむすびしたる侭の蔕を鏡の表を下にして両方とも
車うけ舎を紐の方へねさせて頭とし引手ハ後の方へ流し
足とするなり

○花車ハむすびしたる侭の蔕を両方ともに立て紐つけの方の上の
穴へ引手二ツとも引通し舎ハ車の向ふへちかく

○片蔕組方ハむすびしたる侭の蔕を一方の鏡ハ馬盥の内へ花
留うつひ一方ハ馬盥の外へ出して置なり是を片蔕といふ

○蔕ハ原馬盥に添し品にして往昔陣中の徒然を慰ん
為馬盥に蔕をもつて花を挿大将に献じ奉りしより盥
觽しものとぞ普く人口に傳ふる所なり故に舊言新規に
造りし器物なりとも其名の揃ふれば貴人を招請の
席などハ勿論尋常の會席にも
座上の具にハ用捨あるべき事なり
是によつて床にハ此具を用ひず
臺目にて下にて挿べし

○竹舟の切形ハ圍九寸の
竹を定規として
舳ハ四寸五分
艫ハ二寸五分 穴の長さ六寸二歩 穴の幅ハ圍三寸割
一分を幅と定む 其外竹の大小太細いづれも此割方を以て切べし

（小口半月かくの如し

艫ハ斜に切小口を半月にのこし

○釣瓶の寸法

○口ノ廣サ五寸七分四方

底 三寸九歩 四方

高サ 六寸七分

手ハ口より三歩下りて抜ふし真中に環をうつべし

以上未生流に用ゆる一躰の挿法なり

高サ六寸八歩

底 三寸八歩四方

口 五寸八歩 四方之

右ハ古代の寸法之

○一重切寸法

月の輪の厚サ 七歩口明一寸六ア

一躰の間に節 三ツ

○一重切寸法ハ竹の圍凡九寸を以て定規とし 惣長九寸上の切口より八歩のさがりて釘穴を一明べし 竪六分 横三分 蓮肉の形なり 向ふ正面ハ竹の圓さ三ツ割一分を残すべし 月の輪の七歩ハ天の數長の九寸ハ地の

數合せて十六ゟあるよつて口の明を一寸六分とは　右ハ未生流の寸法也

○或説に竹花器ハ右大將頼朝公霍が岡御造営の時五重代の花器を伐しめ花を生給ふ其後珠光翁二管筒を造り東山義政公御臺所御懐胎御着帯の時奉る是を始とは

○瓢簞の花器ハ摂列住吉の濵辺に旅僧一人瓢簞酒を入休らひゐるを利休所望して花器に作りしよりそどまるとぞ

○抛入折入の事

○世に抛入といふ事有り是ハ其枝葉の手軽き形を称せる由へなれども客へ對して麁末の詞なり然れハ折入と称して可なり抛入と唱へらバ尤も茶室小座敷に用由茶席ハたゞ其時々の一枝を賞翫せることをまして爾のみ心を用ばとも手軽く生べし若花の挿ゐる時ハ幾度も抜出して枝を直し又長さハ伐なぞして直して入ることを苦しかるば挿べきとて入かゝりたる花を捨て余の花を取て挿ことをせべからば

○茶席に忌花ハ　女郎花　柘榴　河骨　金銭花　荻
沉丁花　雞頭花　下る百合　下る桔梗　苅萱　鬼薊
三股の花　茶の花　花樒　深山樒
右の余毒草木の分ハことごく忌べし

○拝領の花器ハ床の真中より少し上の方へ置べし花器の銘模様の要となる所を花にて隠れざる様にすべし釣瓶なりとも床の上座に置べし

○旅立の餞別に柳を結びて生るといふ事あり是ハ唐山にて旅立人を視る時柳を綰ぬるといふ故事に倚て挿るなり

○因に云石州侯の御家に結び柳といへる事有よし是ハ餞別の事にハあらず或時石州侯柳一枝御拝領ありしに殊に長かりしを君思召給ふにハ拝領の一枝恒例にハ任せがたしと御工夫ありて一重切の輪を抜て其侭にさし入給ひしに未だ長くして柳の枝一條たるみを摺たりしかバ拝領の物なれバ恐れ給ひて自ら結び上給ひしよし此故に彼御家の結び柳ハ一條にして綰柳にハあらずとなん言傳ふとぞ然れバ平人にても

結柳の故事

朔望の花ハ心得あるべし當席の客の方より貰ひたる花
なれバ別して思ふまゝに伐ちゞむる事なく成たけ枝を惜
みて生べし又人に花を生させんと朔望に及ぶ時ハ其の
分生よき花を出すべし伐溜を其侭にて花を澤山に
出すべし且人の花華麗なれバ我花ハ寂寞扣べし
是則ち禮なり餘ハ是に准じ推て知べし
○尚己に洩たる事どもハ第四編に委しく著し嗣て
發版に及ぶべし閲して其有益なるを知べし

生花早學三編 畢

弘化二乙巳歳九月

和泉屋弥四郎撰集

江戸書肆　浅草茅町二丁目　須原屋伊八
京　書肆　寺町通高辻下ル　菱屋治兵衛
大阪書肆　心斎橋通博労町　伊丹屋善兵衛版